

判精神を、私に（こ）に見る思いかする。皇族女性の悲劇的地位を排

## 源 経 信 伝 を め ぐ っ て

安 田 純 生

はしがき

源経信は、政治史の上では、摂関政治の最盛期から、摂関家の外戚政策の失敗により、後三条天皇の親政への道が開かれ、白河上皇の院政が開始されるという時期に、一貴族官僚として生きた歌人である。経信の詠歌、とりわけ清新な叙景の歌が、和歌史の展開の上に重要な位置をしめていることについては、ここに一般的に認められているし、また、その伝記に関しても、すでに明らかにされたところが多く、近くにも久保田淳氏の「源経信の和歌について」（『山岸徳平先生頌寿・中古文学論考』所収）に、すぐれた考察が見える。

本稿は、そういう経信の作歌環境の一端をより明らかにするため、四条宮寛子の後宮と経信との結びつき、さらに、彼がもつとも心を許した親友である源政長との交友について、若干の調査と考察を試みたものである。

### 四条宮寛子と経信

四条宮寛子は、藤原頼通の長女で、永承五年（一〇五〇）十二月二十二日に、後冷泉天皇の女御として十五歳で入内している。『荣花物語』卷三十六に、その美々しい入内の有様が描写されており、天皇は、寛子を「御心ざし浅からず」寵愛したという。『今鏡』は、寛子自身が和歌を深く愛好したと伝えるが、少なくとも後宮に奉仕した女房には、下野・筑前・美作など歌人として高名な女性たちが多く、『荣花物語』の作者も、「女房などものはなばなをかしう、はかなき事も故々しう、女房の仲らひもをかしき事多かり」と賛美している。文芸的雰囲気には包まれたはなやかな後宮生活が、おのずと想起される一節である。

そういった、後冷泉天皇在位期の寛子後宮の具体的様相は、『四条宮下野集』によつて窺うことができる。経信は、女房たちとかなり親しく交際しており、なかでも、経信の六条の別亭に、彼の不在中に女房たちが訪問し、「あふぎのつまを折りて、唐めきたる硯の箱

のあるに、見ゆまじくして」和歌を書き残した逸話は、よく知られている。『大納言経信集』にも、四条宮の女房との贈答が六例見られるが、ここにはふたつばかり掲げてみよう。

五月ばかりに、四条宮の、うちにおはしますに、まゐりて夜とまりて、女房のなかにかくてやりたる

旅寝するひとりふせやにさよふけて語らひあかす郭公かな

返し 弁 乳母

ほととぎす過ぎがてにのみ語らひて旅寝の床や寂しがるらん  
おそらく、経信の寝所の近くで、女房たちが世間話に花を咲かせていたのであらう。経信は、あまりにうるさく耳につくので、歌を贈って婉曲に非難したわけであるが、女房のひとりの弁乳母は、「あなこそ、仲間に入れてもらえないので、お寂しいのでしょう」とやり返している。むろんこれは、悪意を含まぬ冗談めかした贈答であり、互いに遠慮のない間柄であったことを示しているのである。

四条宮の筑前の常陸にくだりしに、おくれてくだる人につけてやりたまひし

あづまちの旅の空をぞ思ひやるそなたにいづる月をながめて

返し

思ひやれしらぬ雲居にいたかの月よりほかのながめやはする  
経信は、はるばると常陸国に下向した筑前へわざわざ歌を送り、筑前の方でも、都への幸便を求めて返歌している。筑前の家集である『康資王母集』にも、同じ贈答が見られるが、他に、両者の遠慮のない連歌のやりとりも収められている。このように、経信と四条

宮女房とが昵懇であったのは、単に、父祖以来の摂関家との近い関係という漠然たる理由ばかりではなく、近親者を媒介として、寛子後宮と深くかわつていたのであった。

経信の日録である『帥記』の承暦四年（一〇八〇）六月九日・同年七月十五日の条に、四条宮信濃なる人物が見える。この女性性は、『栄花物語』で、寛子に勤仕した女房を列挙しているなかの「源民部卿の子の信濃守の女」に該当<sup>1)</sup>、日本古典文学大系本の頭注にあるごとく、経信の長兄である経隆の女である。また、「宣旨も里ながら参り給はでなり給へるなり。経長の源中納言の御妹なり」ともあるから、次兄経長の妹（経信にとってはたぶん姉）が、宣旨に任命されているようである。

それに、天喜四年（一〇五六）四月三十日に催された「皇后宮寛子春秋歌合」には、女房と思われる土左（同歌合の「漢文日記」では土左弁とある）が出詠しているが、梅沢本『栄花物語』の勸物などによつて萩谷朴氏がすでに指摘されているとおり、彼女は土左守源貞亮の女である。貞亮は、光孝源氏系の国盛の男で、経信の母の兄にあたると共に、経信の妻の父でもある。つまり経信の伯父でもあり舅でもあったわけであるが、そうすると、女房の土左は、経信の妻かあるいは妻の姉妹のいずれかとなる。萩谷氏はいずれとも断定しておられないが、前述したごとく、『四条宮下野集』に、女房たちが経信亭に押しかけた逸話があり、「あるじもなきに、土左のあけさせて」屋敷に上がり込んだという。下野やその他の女房ではなく、土左が家人に命じて開扉させた点、経信の妻らしく思われる。なお、

治暦二年（一〇六六）の「皇后宮寛子歌合」には、土左内侍の名が見えるが、天喜四年の「春秋歌合」での土左の歌が『金葉集』巻三には、作者名、土左内侍で入集しているので、土左・土左弁・土左内侍は同人である。

以上によって明らかのように、寛子に仕えた女房のうち三人までが経信の近親者であり、彼女たちによって、経信を気軽に受け入れる体勢が、四条宮後宮にすでに準備されていたのである。しかも経信は、広く諸芸に通じた才人であったのであるから、彼女たちと経信との隔心のない親密な交渉も、すなおに首肯できるのである。

さて、永承五年の寛子入内の年、経信は三十五歳であったが、三十代から四十代にかけての経信が、四条宮後宮から感受した影響は、けっして小さくはなかったであろう。永承四年（一〇四九）十一月九日に開催された「内裏歌合」で、歌人兼講師の晴の大役をつとめ、歌詠みとしての自覚を強く意識し始めていたと思われる経信が、女房たちとの文芸的交遊を通して、ますます和歌への精進を深めたとの想像は、あながち無理なものではあるまい。

経信が自邸で和歌会を主催した記録が、『橘為仲朝臣集』などに見える。

月、水を照らす

この歌は、九月十三日の夜に、頭の中將、みぎのむまのかみ経信の君の六条にてよみし。勸解由次官あきひらが題なり行く水の音せざりせば月影をまだきるにけるつらとや見む

（『橘為仲朝臣集』）

家にて月照水といへる心を人々よみ侍りけるに

大納言経信

住む人もあるかなきかの宿ならし声間の月のもるにまかせて

（『新古今集』巻十六）

経信の歌の詞書は、『大納言経信集』や『帥大納言集』では「六条にて人々よみしに、月」とあり、歌題が相違している。流布本系の『大納言経信卿集』のみ、『新古今集』と同じく「家にて月照水といへる心を人々よみけるに」とある。<sup>3</sup> たしかに声は水との関連性がある語であるが、やはり、「月照水」の題は歌意にそぐわない感じがするので、同じ六条亭和歌会というところからの伝承上の混乱があるのかもしれない。もともと、経信は、嘉保元年（一〇三四）八月十五夜の鳥羽殿での盛大な観月御遊で、「翫池上月」という題に基づき、「照る月の岩間の水にやどらずは玉るる数をいかで知らまし」と詠んでいるが、池字なきゆえをもって非難を蒙ったと伝えられている（『袋草紙』上巻）。題者が経信自身であるにもかかわらず、晴儀の場でこのような自由な詠風を示しているのである。したがって、「住む人も」の歌は、ごく私的な会でもあるし、歌題にさほど拘泥しない奔放な詠作態度によったものとも受け取られる。

『橘為仲朝臣集』の「みぎのむまのかみ」は、犬養廉氏が指摘されたように<sup>4</sup>、左馬頭の誤写と考えられる。経信は、寛徳二年（一〇四五）四月から、少弁を経ずして右中弁に直任された康平五年（一〇六二）三月まで左馬頭であったが、右馬頭の経歴はない。出題者の藤原明衡は、天喜四年に式部少輔、康平五年に文章博士に任ぜら

（5）  
 れているので、勘解由次官の職にあったのは天喜四年以前であらう。  
 兄の経長は、永承二年（一〇四七）十一月から天喜六年（一〇五八）四月まで勘解由長官であったが、そんな関係から、兄の下役である明衡を六条亭に招待したのかもしれない。橘為仲は、大養氏によると、寛子立后と同時に皇后宮大進に任ぜられたらしく（ただし群書類従本『康平記』の康平三年七月十七日の条には、皇后宮権大進為仲とある）、為仲が和歌会に参じて家集に記録を残したのは、寛子後宮での経信との交流によるものと察せられる。そうであるならば、この六条亭和歌会は、寛子が皇后にのぼった永承六年（一〇五一）から天喜四年まで、経信の年齢でいうと三十六歳から四十一歳までの、ある年の九月十三日の夜に催されたと推定できる。

自邸での和歌会の主催という経信の行為に、歌人としての自負と、和歌への強い情熱とを看取することが可能であるが、それは、開催時期から考えても、彼が当時しきりに出入りしていた寛子後宮の文芸的世界と無関係ではあるまい。経信は、後宮での風流な交わりから文学上の刺激を受容しつつ、より自覚的な歌人形成を行っていたのではないであらうか。経信に限らず、同様に後宮サロンのメンバーであった経長や橘俊綱、それに源師賢も、それぞれ桂・伏見・梅津の別墅で和歌会を企画しているものであり、これら処々の会も、四条宮サロンの延長線上にあるものとして位置づけることができる。残念ながら、『四条宮下野集』は、治暦四年（一〇六八）の後冷泉天皇崩御後の寛子周辺について何も語らないが、経信と女房たちの交渉は、その後も継続したと思われる。

経長は、治暦元年（一〇六五）十二月八日に皇后宮権大夫に任じているが、この時の皇后は寛子である。寛子が、中宮・皇太后と地位が移るに従って、経長もまた、中宮大夫から皇太后宮大夫へと遷任し、延久三年（一〇七一）四月九日に病氣により致仕するまでその職にあった。そして同じ年の六月六日に、六十七歳で薨去している。加うるに、経信の長子である道時も、経信の推挙があつたためか、承暦元年（一〇七七）に太皇太后（寛子）宮権亮に任ぜられている（『水左記』承暦元年十二月十日の条に「美作介道時」とあり、関十二月二十七日の条には「太皇太后亮道時」とあるから、この間に任命されたのであらう）。寛治三年（一〇八九）八月二十三日に、太皇太后寛子は、頼通ゆかりの宇治の別業の泉殿で、歌会を主眼とした扇合を催している。寛子は、このころ時々京洛を離れ、閑静な宇治の地で生活していたようである。歌合には、月・霧・萩・鹿・雁・紅葉と季節にちなんだ六題が出題され、七十四歳の経信は、判者兼歌人であつた。歌人には子の俊頼も名を列ね、次男の基綱も右の講師をつとめている。のみならず、『大納言経信集』には、『四条宮女房ども、扇合といふ事して、左右かたわきて、扇にかかむ歌と申しければ、しのびて女房にとらせて侍りける」と詞書された歌が収載されており、女房の安芸と遠江乳母のために、ひそかに二首の歌を代作しているのである。このように経信の意志が深く浸透した歌合であつたが、それも、数人の近親者を通じて、寛子後宮と緊密に結びついていたからこそ、大きな役割をふりあてられたのであらう。



の交渉は、その後も継続したと思われる。

### 源政長と経信

源政長もまた、『四条宮下野集』に二回顔を見せ、寛子後宮と結びついていた人物であるが、経信とは一通りでない交際をしている。

経信の家集に、橘俊綱との贈答がいくつ収載されているので、俊綱との親交が強調される傾向があるが、経信と俊綱とは、完全には心を許しあっていないように感じられる。それには、俊綱が、橘氏を称しているとはいえず、宇治の関白頼通の実子で、寛子の兄という血筋の上での憚りも存したであろう。『帥記』の承暦四年（一〇八〇）五月十一日の条に次の記事がある。

今夜伯馬守□有權賞事云々、中宮權大夫俊明、同權亮実公、但馬守俊綱三人可随申請、又女三人叙位云々、件賞者、依為中宮御所、被勸賞宅司、此人人或二位、或四位□下、何急被賞乎、又雖為但馬宅、已獻中宮者、何有勸賞乎、末代作法道路以目、今夜不參中宮、退出了、

ここには、俊綱宅が白河天皇の中宮賢子の御所となり、その功によつて勸賞にあずかることへの批判が書かれている。『道路以目』は、賞に不満な者が他にも存在した事実を意味しているのであろうが、経信は、『末代作法』とまで極めつけている。たとえ親しい友人間であっても、馴れ合いを排し、批判すべきは批判するという、経信の謹厳実直な一面を物語っているとも解せられるが、それにしても、暖かい友情の感じられる書きぶりとは思われない。こういった経信であるが、俊綱へのそれとは比較にならぬほどの深い友情を、政長

に対しては感じていたようである。

源政長は、経信と同じく宇多源氏の出身であるが、経信が重信流に属するのに対し、雅信流の資通の三男で、師賢の弟である。すでに先学諸氏が述べられていることく、資通を、「琵琶血脈」や「文机談」などが経信の琵琶の師と伝承しており、『続古事談』第五などには、琵琶の名器玄上（玄象）に関して、経信が、資通の言を祖述している話が見られる。政長が没したのは永長二年（一〇九七）閏正月四日であるが、藤原宗忠が、『中右記』の同日の条に要を得た政長伝を書き残しているの、それを引用しておく。

已時許正四位下行内藏頭兼備中守源朝臣政長卒年六、是故播磨三位済政孫、故参議資通三男、母故頼光朝臣女也、後冷泉院御宇初聴昇殿、経近衛少将、民部輔、後任若狭、任中済公文任、次第任備中兼内藏頭、今為内并院殿上人、伝累代之業、長管絃之道、寛治元年以来為当时御師、常近龍顔、而從去年勞邪氣、今日遂逝去、哀哉、

これによつて、政長の生年は、逆算して長暦二年（一〇三八）となり、長和五年（一〇一六）生れの経信より二十三歳年下である。ちなみに、母親について、『尊卑分脈』は、政長の母を尾張守憲広の女とし、師賢の母を頼光朝臣の女とするが、『中右記』に従えば、政長の母も源頼光の女である。同記の嘉保二年（一〇九五）十月二十五日の条に、政長の母九十三歳の死を録し、やはり「是故頼光朝臣女也」とある。政長はまた、経長の猶子であつたらしいが、政長の名は経長に由来するのかもしれない。

前引の『中右記』に「伝累代之業、長管絃之道」とあるごとく、政長は、管絃に卓越した才能をあらわし、琵琶や和琴にも長じていたようであるが、ことに横笛の名手として著名であった。堀河天皇の笛の師をつとめ、その賞で、寛治三年（一〇八九）正月に子の有賢の昇殿がゆるさされている。兄の師賢も名高い管絃者で、特に和琴の才の卓拔さをうたわれており、『続古事談』は、政長を「横笛ノ上手ナリ」と評し、師賢を「和琴ノ上手ナリ」と評している。『袋草紙』上巻には、天喜四年（一〇五六）の新成桜花宴（中殿御会全部類記）によると閏三月二十七日に開かれたの「殿上記」の引用があり、それには、「此間左馬頭経信、刑部大輔師賢、筑前権守政長、応召候實子數是皆携糸竹之輩也」と三人を併記している。『御遊抄』によれば、康平三年（一〇六〇）七月十七日の任大臣の御遊、承保元年（一〇七四）十一月二十三日の清暑堂の御遊、同三年（一〇七六）正月十九日の任大臣の御遊、同年十月十二日の臨時御会などでも、経信・師賢・政長が、おのおの琵琶・和琴・横笛と得意な楽器を演奏して、その技を競いあっている。

『散木奇歌集』第十に、経信が奈良の七佛寺を参詣した際の、東大寺の坊での俊頼と備中守政長との連歌が見られ、政長を同伴していたことがわかる。『帥記』には、政長と行動をとみにしている経信が、随処にあらわれる。政長の八条鳥丸亭にもしきりに出向っているが、政長亭は、趣向を凝らした風流な家宅であったと思われ、ここに泉水が美しかったようである。<sup>(7)</sup>

江州示送云、今日可向若州八条、聊為儲饌也、予答云、可随命、

又示送云、春宮権大夫、右少弁伝聞此事可参会、為之如何、答、可在彼人之心者、来八条者相具赴向八条、先向少納言洞院亭<sup>日來有</sup>、次先是家主江州藏人弁<sup>相具歌</sup>、在彼亭、次春宮権大夫被<sup>女五人</sup>来、遊汎之後入夜各帰去、

これは、『帥記』の永保元年（一〇八一）六月三日の条である。

「江州」は、『水左記』の同年十月七日の条に「近江守忠綱」とあるので、橘俊綱の実兄である藤原忠綱と考えられる。この日、経信は忠綱の誘いに応じて若狭守政長の八条亭を訪れているが、途次、子の少納言基綱の病床を見舞っている。八条亭の会には、春宮権大夫源季宗・藏人弁源師賢・右少弁藤原伊家に加わり盛況であったが、その反面気づまりな空気も一部にあったらしく、経信は、翌四日に再度近江守忠綱と「密々」に八条亭に向い、「終日遊蕩」している。五日にも、中納言源資綱と同所に赴き、「終日閑談」の後、資綱は帰宅したが、経信は八条亭に宿泊しているのである。政長亭は、経信にとつて、それだけ気のおけない場所であったのであろう。それはそのまま、経信と政長との親交の度合をあらわしている。経信と政長は、ちやうど経信と俊綱とが和歌で結ばれていたごとく、音楽を仲立ちとした肝胆相照らす親友同士であった。その背景に同族意識が存在したことも無視できないであろうが、二十三歳の年齢差を思うと、経信は政長に、友情というよりも、むしろ子に対する父の愛のような感情を抱いていたのかもしれない。両者の官位の差など、さほど問題ではなかったのだと思われる。

ところで政長は、承暦二年（一〇七八）四月二十八日の「承暦内

江州示送云、今日可向若州八条、聊為儲饌也、予答云、可隨命

裏歌合」に、左の歌人として参加しているが、次の一首が大江匡房の「いかなれば春来るからにうぐひすのおのれが名をば人に告ぐらむ」と合わされて持となっている。

年をへて聞けどあかねはわが宿の花に木づたふうぐひすの声

このことについて順徳院は、『八雲御抄』巻三で、「政長、わがやどの花に木づたふとよめり。彼は歌人ならぬど被撰入畢」と述べ、「悦目抄」にも、「かれはさせる歌人ならぬど選び入れらる」とある。たしかに政長は、兄の師賢と違って勅撰集の入集歌もなく、歌人とは称しがたいようである。経信の家に、当然あつていい政長との贈答歌が、まったく見あたらないのも、その辺の事情に起因しているのであろう。

しかし、『新拾遺集』巻二十に、経信の次の長歌が収められている。

源政長朝臣の家にて、人々長歌よみけるに、初冬述懐といへる心を詠める

あらたまの 年くれゆきて ちはやぶる 神無月にも なりぬれば 露より霜を 結びおきて 野山のけしき ことなれば  
(以下略)

『大納言経信集』では、同歌の詞書に「初冬述懐、永保二年十月日刑部卿政長八条会」とある。政長が、永保二年（一〇八二）十月に、人々を集めて八条亭で和歌会を催しているのであり、経信以外には俊頼や大江匡房も参会しているようである。長歌の会であるのが注目されるが、政長は会場を提供しただけで、實際上の企画者は経信ではなからうか。和歌にそれほど熱意を持っていない政長が、

ところで政長は、承暦二年（一〇七八）四月二十八日の「承暦内

風変りな長歌の会を企図するとは考えにくいし、しかも経信は、受領層の貴族や僧侶のもので、たびたび和歌会の開催を首唱している形跡がある。

土左守頼仲が長岡といふ所に、夜とまりて、山家冬夜  
山里は夜床さえつつ明けぬらしとかたぞ鐘の声きこゆなり

（『大納言経信集』）

頼仲が長岡の家に故帥殿おはしまして、一夜とどまらせ給ひて、山家冬夜といへる事をよませ給ひけるに、よめる  
ひとりぬる宿はふぶきに埋もれて岩のかげ道跡たえにけり

（『散木奇歌集』第四）

経信と俊頼の家集から、同一和歌会での詠と思われるものを引用したが、『散木奇歌集』の方が一般的に、自撰のせいもあるが、詠歌の状況を詳細に記している。源頼仲の長岡山荘での会であるにもかかわらず、経信が詠み、俊頼がそれに和したとする詞書の表現から、首唱者は、故帥殿すなわち経信であったと推定される。

あまの川といふ所にて、かはらけとりて  
またも来む秋とちぎればあまの川われ七夕に劣らざりけり

（『大納言経信集』）

河内守経国、かの国におもしろき所ありと申しければ、帥殿忍びておはしけるに、あまの河といふ所にて、在中将の七夕つめにとよめる所なりとて、舟とどめて河のほとりにおりてあそばせ給ひけるに、かはらけ取りて、おのおの歌よませ給ひけるに、よめる

千鳥なくあまの河辺にたつ霧は雲とぞ見ゆる秋の夕暮

〔散本奇歌集〕第三

「忍びておはしける」とあるにしては、多数の同伴者がいたような感があるが、この場合も、長岡の会と同様である。国司藤原経国の招待で河内国を来訪した経信は、在原業平に由縁のある天之川で遊宴を開き、人々に歌を詠作させたようである。

月照網代

月清みせぜの網代による氷魚は玉藻にさゆる氷なりけり

〔大納言経信集〕

故帥殿、田上におはしましたりしに、ぐしまうされたる人々歌よまれけるに、月照網代といへることをよめる

網代には月の光もあるものをなますらをのかがりたくらむ

〔散本奇歌集〕第四

経信は、近江国栗田郡田上に山莊を所有していたが、これはそでの和歌会である。「月照網代」は、あるいは田上川に設けられた網代を属目しての出題かとも思われるが、いずれにせよ冬期に催されたことは間違いない。経信が各所に赴く折に、多数の人々をもとなつていたことは注意されるが、「ぐしまうされたる人々」とは、より具体的には、政長や頼仲のごとき、四位・五位の中下級貴族たちであろう。経信は、こういった、いわゆる受領層の貴族の中心にあつて歌会をリードしており、いわば歌壇の領導者としての地位を保持していた。有名な橘俊綱の伏見亭での歌会においても、経信は、単に常連という以上の位置をしめていたと推測される。したがって、

政長の八条亭の長歌の会も、やはり経信の首唱にかかり、経信を中心として運営されたと解するのが自然である。ただ、長岡や天之川、田上における和歌会は、当座の出題のようであるが、八条亭の場合、長歌という即詠しにくい形式だけに、「冬夜述懐」は兼日の題で、前々から周到に計画された会であつたに違いない。

さて、寛治八年（一〇九四）六月十二日に太宰権帥に任ぜられた経信は、翌嘉保二年（一〇九五）七月二十二日に、老軀をひきさげて鎮西へ発向しているが、ふたたび都の土を踏むことなく、永長二年（一〇九七）閏正月六日に八十二歳で薨去している。それは奇しくも、政長が没した日の翌々日にあたっている。政長が病魔におかされていたことは伝え聞いたかもしれないが、その死は、ついに知ることがなかったであろう。ふたりは、互いに親友の死の報に接することなく生涯を終えたわけであり、それはある意味で、幸運であつたとも思われる。

注1 三善為康の『拾遺往生伝』中巻に経隆往生譚が収められ、それに「前

常陸守経隆者、大納言道方卿之長男也」とある。経隆が信濃守を経たのは、『大式資通家歌合』に「前信濃守経隆が見え、ほぼ確実である。後藤祥子氏の『源経信伝の考察』（『和歌文学研究』一八号）参照。

注2 『平安朝歌合大成』第四卷二一〇四ページ

注3 関根慶子氏の『中古私家集の研究』によれば、『大納言経信卿集』は、勅撰集などから経信の歌を抜粋して成立したものとのことである。

注4 「橘為仲とその集」（『国語と国文学』昭和三三・一二）



単に常連という以上の位置をしめていたと推測される。したがって、

注4 「橘為仲とその集」(『国語と国文学』昭和三三・一二)

注5 小島憲之氏校注『懷風藻・文華秀麗集・本朝文粹』(日本古典文学大系)の解説二九ページ。

注6 後藤祥子氏の「源経信と琵琶」(『中古文学』四号)、久保田淳氏の「源経信の和歌について」(『山岸徳平先生頌寿・中古文学論考』)など参照。

注7 『帥記』の永保元年五月二十六日の条によると、関白藤原師実が「欲巡見所々泉」して諸亭を巡回しているが、その中に経信の大町亭とともに政長の八条亭が含まれている。

## 『門外芸術』漱石号(大10・1) 目次

角川書店刊行の『日本近代文学大系』は、参考文献欄の雑誌の特集号、追悼号等ではできるだけ目次を記すことにしているようである。『夏目漱石集』も既刊の『I』『II』『III』のいずれもが、重複をいわず特集号等の目次を掲げている。しかるに『II』では『門外芸術』が脱落しており、『I』と『III』とでは、雑誌名、特集名、発行年月は記されていて、目次が落ちている。多分実物を見ることができなかったためと思われる。たまたまこれを架蔵しているので、目次を紹介したい。

漱石号『門外芸術』第一巻第四号 大11・1・1 門外芸術社)

阿部次郎「夏目先生の書畫」安倍能成「漱石先生の遺墨を見て  
小宮豊隆「漱石先生の畫」三五庵主「漱石先生の猫の賛」野上豊  
一郎「専門家と門外漢」阿部蘇春「遺墨展覧会に對する小感」  
太田水穂、久保田金遷外十三人「漱石氏の書畫に對する諸家の  
感想」柏居子「友人及び門人の見たる漱石先生」

以上のほか、口絵として漱石筆の絵を写真版で八ページにわたり十葉つけており、漱石の文章を「日記と断片の中より」と題して掲載している。

(嘉部嘉隆)